

動物飼育の意義と学校での取り入れ方

寺門 美幸* 矢野 博之**

はじめに

私は、幼少期から動物に関心が高く、動物とのふれあう機会を多く持ってきた。そこから、言葉の通じない動物に対する思い入れや葛藤に加え、生と死も真近で感じてきた。そのこともあり、心の発達に関心が高く、教育現場における心の成長の扱われ方について興味を抱いてきた。折しも、現代の子どもたちの問題として、コミュニケーション能力の不足、イジメの悪質化や暴力行為、不登校など問題行動や心の発育不純が話題となっており、児童のみならず社会全体で簡単に傷つけ合い、命が奪われる世の中であることがメディアでも頻繁に取り上げられている。そのことから、教育現場で必要とされるものについて考え、心の成長と生命の実感を検討しておきたいと思った。そこで、学校現場でみられる動物飼育について、その意義とその有効な取り入れ方に焦点化し、主題に設定することとした。

I 研究の方法

本研究では、学校飼育の第一人者である獣医師の中川美穂子氏(全国学校飼育動物研究会事務局長)が動物飼育支援に関わる小学校(都内7校)を指導あるいは訪問する際に同行し、学校現場での取り入れ方の詳細と中川氏の指導を見学調査する。その中での各学校での飼育への関わり方の違いにより、児童の反応にどのような違いがみられるのか、その影響と効果について授業質問分析を行った。また、いくつかの学校の動物飼育に関する作文分析を行った。それにより動物飼育の意義と有効な取り入れ方を明らかにしていきたい。

調査対象は、授業質問分析では、生活科の授業として行われた単発のふれあい教室1校(2学年)、委員会児童に飼育指導を行っ

た委員会飼育校1校(5・6学年)、年間を通しての学級活動として行われているクラス飼育校1校(1学年)、動物飼育活動を総合的学習の時間に位置づけて1年間学年全員で行う学年飼育校4校(4学年)の計7校の児童であり、各校での中川等獣医師による支援時間はそれぞれ45分間授業1時限であった。また、東京都獣医師会主催の動物飼育作文コンクールの作文集から、委員会飼育校1校(3・4・5・6学年)、学年飼育校2校(4学年)の計3校の各校8名ずつの児童の作文を分析対象とした。

なお、総合的学習に位置づけた動物飼育活動は、1学期の導入期から2学期の発展的疑問点を解決する授業、3学期の振り返りとしての「下級生に飼育活動を引き継ぐ集会」を行うが、今回の学年飼育校の対象授業は、2学期に行われる「疑問点を獣医師に質問し回答を得て、より発展させるための授業」として行われた。

これらを踏まえて、動物飼育の意義とその有効な取り入れ方について考察していきたい。

授業状況

2 学校における飼育実践

(1) 単発のふれあい教室1校(2学年)

(2011.9.9)

①概要：生活科・テーマ「ジャック・コッコとなかよくなるろう！」

- ・第2学年 5校時(13:40~14:25) 学校の飼育体験はない。
- ・児童31名(介助の都合上 動物の数により、4班に分ける) 1班 10~11名ずつ
- ・担任1名

支援者：(一班1~2名)(15分前集合、事前に抱き方など獣医師と一緒に体験)

参加動物：学校・園の動物(チャボ2羽)・獣

医師会より借り入れ（うさぎ3羽）

（中川氏）

獣医師：東京獣医師会支部より4名，同理事

支援：保護者 8名ほど

②実践

- ・子どもたちに事前に「動物は怖がっているから静かにしましょう」と周知する。

時間	内容	備考
導入 1分	（担当の先生）が授業，獣医師を紹介	子どもを最初から班に分けて手を洗わせる
動物の話し 8分	（獣医師）最初に，騒がないように注意（動物がこわがるので，静かにしてくださいね） ニワトリ，ウサギと仲良くなる方法 動物の心と体への気遣いの話	PCプロジェクター
動物の体 5分	（獣医師）抱き方指導，潰さないように，優しくすると暴れない．心音を人と動物と比較	大人，子ども，動物と順に心音と比較．拡大心音計を使用（できればかけ算）
ふれあいタイム 20分	班にわかれ，子どもに動物を抱かせる． 各班に支援者などの介助者がひとりずつつく．担任と獣医師で補佐 各班にタオルと動物一匹ずつ渡す （動物体験は，動物の体を気遣って，1種類のみ）	正座したしっかりした膝にバスタオル2種に折って膝に置いて，その上に動物を抱かせる． バスタオル1班あたり1～2枚 学校で準備
質問タイム	（先生が質問者を指名）	回答，獣医師
挨拶 1分		（獣医師）命を握っているのは皆さんです．
まとめタイム	（先生）	挨拶

③子どもの反応

子どもの質問	獣医師の回答
<ul style="list-style-type: none"> ・うさぎの耳はどのように薄いんですか． ・なんで鶏には赤いのがあるんですか． ・なんでニワトリは怖いんですか． 	<ul style="list-style-type: none"> ・うさぎや動物は汗をかかない．耳の皮の薄い所の血管で血液を冷やして体温を下げています． ・あれは「肉だれ」っていう．オスの方がカッコよくできている．メスは端っこでそっと卵を温めるために地味にできているんじゃないか． ・ニワトリはくちばしがあるもんね．でもニワトリはくちばしで食べる．人をつつくとしたら，メスを庇うとき．静かにして，安心させて

「目立った発言・行動」

- ・質問タイムのときに，あまり質問が出なかった．
- ・自分の学校には何種類の動物がいるのかあまり把握していないようだった．
- ・発言が他人行儀なところがあった．
- ・校長先生は環境衛生の面で今回の活動を入れようとしている様だった．

(2)委員会活動校（2011. 11. 10）

①概要：児童 第5・6学年 計 15名程度

一学期に前期委員にフレイ教室をし、2回目の授業「掃除の仕方・指導」

②実践 後期委員会の活動

・学習
<ul style="list-style-type: none"> ・飼育動物を2羽教室に連れてくる。 ・黒板に名前を書かせる。 ・前期からの飼育委員の確認（6/17人） ・軽い質問タイム ・中川先生のお話（冬に向かう世話の注意を動物の気持ちを重点に説明）
・全員で飼育小屋掃除

③授業の様子

「子どもたちから獣医師への質問」

子どもの質問	獣医師の回答 中：中川先生
・チェマの毛がちぎられたりしていてだいじょうぶですか。	中：（その時の詳しい状況を聞く） ニワトリは突つき順位がある。強いのが下のを突つく。

「子どもたちの反応」

- ・飼育がよかったと思う（5/12）
- ・飼育が嫌だと思う（3/12）
- ・他（5/12）

「特徴的な発言行動」

- ・「(チャボを教室にいれるなんて) なんでそんなのもってくんだよ」
- ・「気持ちわりい」
- ・「うんこした。きったねー」

「行動」

- ・質問タイムには、児童からの質問が特になく、獣医師が質問を問いかけるものであった。
- ・一部の児童は先生の話の話を聞いているが、1/3の児童は興味すら示さない。
- ・同じく掃除指導中、一部の児童は(5人程度)は一生懸命掃除をしているが、他は遊んでいた。数名の男児に至っては、「追いかっこ」をしていて完全に遊んでいた。
- ・担当教員も委員会時だけ飼育舎を覗くのか、秋なのに夏用の遮光が除去されていないなど、良く分からないらしい。

(3)クラス飼育校（附属小学校）（2011.10.9）

①概要： 児童 第1学年 1学級 40名
2学期から教育課程にもとづいて10名に1匹ずつのモルモットの飼育活動を実施中。今回の公開研究授業は、「餌を与えることを通して、思いやりを培う」をテーマにより動物を良く観察させることを目標の授業であった。中川氏はアドバイザーで、授業を見守る立場であった。

②実践 事前に児童が持参した様々な餌を示し、各人にその餌をもってきた理由を発表させた。続いてモルモットはどれを食べるだろ

うと話あい興味を培いながら予想させ、その後実際に何人かの児童が持参の餌を与え、モルモットの様子を観察してモルモットが本当は何を食べるのか観察し、何を好むのかという気持ちを想像させていた。

③児童の様子

自分達のモルモット達を大事そうに観察し、食べるか食べないかと一喜一憂して楽しそうにかつ活発ながらも、モルモットが安心して餌をたべるようにとの教師の言葉かけで動物への思いやりを見せていた。参観の親達も嬉しそうであった。

(4) 学年飼育校 2 (2011. 11. 14)

①概要：児童 第4学年 3学級 男子59名 女子52名 計111名

全員で1学期から飼育を担当しており、1学期に獣医師と保護者支援で全員で動物ふれあい教室をしている。今回が2度目の獣医師活用

②実践：事前に獣医師に渡した質問表にもとづいて、児童と獣医師が応答する。ただし、以下2校について、紙面の都合により獣医師の回答は割愛した。「疑問点検討授業」

(チャボについて)

・あなをほって体を入れているのは、なぜですか。・卵があったときは、どうしたらよいですか。

T：お土産でもって帰っている。・チャボが生んだ卵は孵化しますか。

・チャボが小屋に戻したとたんにエサをちらかします。どうしてですか。

(うさぎについて)

・あなをほって脱走するのは、なぜですか。・ウサギが柵に入るとふるえます。なぜですか。

・最近、ウサギの毛がぬけます。大丈夫ですか。・抱いているときに、逃げ出しそうになったら、どのように降ろしたらよいですか。・うさぎの目はどうして赤いのですか。・鳥じゃないのにどうして1羽2羽と数えるのですか。

(どちらにも関わること)

・これから寒くなりますが、どんなことに注意して世話をすればいいですか。

・夏と冬では世話の仕方に違いはありますか。例えば、えさの量や掃除中に置く場所など。

・食欲がないときにはどうしたらよいですか。

・元気がないときの、よい見分け方はなんですか。・寒くなっても、動物たちがあたたかく過ごすためには、どんな工夫がありますか。・うさぎやチャボの気持ちを落ち着かせるにはどうしたらいいですか。・うさぎやチャボは風邪をひかないのですか。・うさぎやチャボの寿命はどのくらいですか。

(その他)

・家で飼っている犬が、最近触ろうとするとびくびくふるえます。そういう時期があるのですか。

・金魚が水槽から顔を出して口をパクパクします。どうしてですか。

・人間以外の動物の目の見え方を教えて下さい。・動物の目からは、どのように見えているのですか。

・飼っているセキセイインコの目玉が興奮すると小さくなるみたいです。そういうものなのですか。

・治療がむずかしい動物は何ですか。・治療していて、一番嬉しかったことはなんですか。

(その他、その場での質問)

・オスはなんでトサカがあるんですか。・うさぎは木の皮を食べていいんですか。・うさぎがすみから出てこないのはなんでですか。・トンボには耳があるのですか。・動物アレルギーだけど、アレルギーが少ない動物は？

・チャボはオス・メスで飼うのが良いのですか。・飼育小屋の上に登るけどなんでですか。

・魚が大きいやつが小さいやつを追いかけるのはなんでですか。・金魚は水槽を大きくすると、その分大きくなりますか。・インコはどのくらい覚えているのですか。

・動物の涙を見たことがいけど、泣きますか。・ウーパールーパーは何で半透明なんですか。

・亀は何年生きるんですか。・ハムスターもオス・メスでいたほうがいいんですか。

・掃除が終わっても小屋に入らないのはどうしたらいいですか。

「特徴的な発言と行動」

- ・111人という大勢の中でも、ふざける児童は見られず一生懸命獣医師の話を聞こうとする態度がみられた。
- ・最後の自由質問タイムでは、質問が引切り無しに出てきた。
- ・児童にはメモ用紙が配れていて、はじめは書き方がわからなそうな児童もいたが、徐々に気

になったことを書き出し、図を描いたり、用紙が足りなくなるほど書く児童もいた。

(5)西東京市G小学校 学年飼育2 (命の授業) (2011.12.2)

①概要: 児童 第4学年 3学級 男子34名 女子48名 計82名

全員で1学期から飼育を担当しており、1学期に獣医師支援で全員で動物ふれあい教室をしている。今回が2度目の獣医師活用授業「疑問点検討授業」。ただし獣医師の回答は割愛。

②実践

4年生 質問の会と「スカイとのお別れ会」

日時:平成23年12月2日(金)

場所:多目的室にて

内容:①あいさつ(学年主任)

②校長先生のお話(スカイについて、「みなが一生涯懸命守ってくれたね」)

③中川先生から季節の飼育の仕方の説明

④質問タイム 事前質問票に基づいてのやりとり

⑤中川先生からスカイの話

⑥スカイへの手紙(各組児童)

⑦献花

⑧あいさつ(学年主任)

③授業の様子:事前に用意した質問を元に行われたが、直前に死亡したチャボのスカイの死因説明とお別れ会の意味もあった。

事前質問

(チャボ)

- ・スカイが「ホーホーホー」と鳴くのはなんですか。・ひよこのオスとメスの見分け方はなんですか。
- ・オスがトサカが大きいのにメスは小さいのはなんですか。・ホワイトはチャボですか。
- ・ホワイトがうさぎに喧嘩するのはなんですか。・花子はどうして暴れるんですか。
- ・スカイが亡くなる前にホワイトが上に乗っていたのはなんですか。
- ・ホワイトもバロンも茶色いのにホワイトだけなんで白いんですか。
- ・鳥にラビットフードをあげていいんですか。・ヒヨコの好き嫌いは大丈夫ですか。
- ・どうしてニワトリを外に出すと遠くに行くのですか。・ヒヨコが産まれてから卵をうまないのはなんですか。
- ・ホワイトの部屋の扉を開けるとうさぎの方に入るけどどうしてですか。
- ・ホワイトはスカイが死んで一人になって寒くないのですか。

「特徴的な発言や行動」

- ・スカイが亡くなり、早くその話を獣医師にききたいようであった。
- ・飼育動物のことを必ず名前呼び、些細な変化をよく観察しているようであった。
- ・素朴な疑問をなんでも獣医師に聞こうと「2回聞いてもいいですか。」という担任への質問があった。
- ・スカイのお別れ会では、一人がはじめに泣き始め、下をむいてうつむいている児童が複数見られた。
- ・スカイへの手紙の作文発表では、大勢の児童が泣き始め、担任、参観の親までもが涙を流すものであった。
- ・子どもの言動から総じて、スカイが大切にされてきたことが手に取るようにわかった。

3 授業質問の分析と考察

以上、飼育の取り入れ方の違う7校の小学校の内、単発ふれあい体験校1、委員会飼育1、学級飼育1、学年飼育2校の5校の授業状況のさわりを提示した。これら授業内で出てきた児童の質問・発問について、①「振り返り」、②「生命認知」、③「個体認知」、④「観察力」、⑤「喜び」、⑥「感情」、⑦「哀れみ」、⑧「感情移入」、⑨「思いやり」、⑩「工夫・気遣い」、⑪「苦労」、⑫「達成感」、⑬「今後の願い・目標」、⑭「母性」、⑮「葛藤」、⑯「責任感」、⑰「理由付け」、⑱「問題解決」、⑲「分析・自分の考え」、⑳「成長」、㉑「特徴表現」、の枠組で分析した。ただし、学級飼育は1年生であり、授業での質問タイ

4 作文の分析と考察

東京都学校動物飼育作文コンクール作文集のうち、学年飼育校2校16編、委員会飼育8編を以下の観点の言葉を拾って分析を試みたところ、学年飼育の作文に多く表現されていた。

内容は、振り返り、生命認知、個体認知、個体認知、観察力、喜び体験、感情、哀れみ、感情移入、思いやり、工夫・気遣い、苦労・努力、達成感、願い、母性、葛藤、責任感、理由付け、問題解決、分析力・自分の考え、成長・変化の実感、特徴表現（「プラスの表現」「マイナス表現」などであった。このことから、飼育をするにあたり学年飼育のように指導する側が意図をもち、段階を踏んだ関わりをすることにより、理由付けをした正確な考えを持てるようになるのではないかと考えられる。そして、獣医師との連携により、児童の適切な知識と関心の深まりにつながりより一層の児童の学びにつながるのだろうと考えられた。

II 考察

児童と動物との深い関わりのある「学年飼育」は、教師の関わりが浅く児童と動物の関わりが児童により非常にばらつきがある「委員会飼育」や普段動物と全く関わっていない「単発ふれあい教室」等の異なる実践と比べ

ムがなかったのでデータが取れなかった。そのため「単発ふれあい授業2学年31人」、「学年飼育1小4学年92人、同2小4学年111人」、「委員会飼育5・6学年12人」の3種類の飼育方法からを対象とした。

以上、授業質問からわかる分析結果として、「生命認知」「観察力」「思いやり」「工夫・気遣い」「興味・関心」の項目で変化が見られ、飼育動物との関わりが浅い「単発ふれあい授業」「委員会飼育」を取り入れている小学校と比較して、飼育動物との関わりが深い「学年飼育」校の児童には、前掲のごとく質問の量や内容に明らかな変化が見られた。このことを踏まえて、作文分析も行った。

ると、筆者が評価観点とした①「振り返り」②「生命認知」③「個体認知」④「観察力」⑤「喜び」⑥「感情」⑦「哀れみ」⑧「感情移入」⑨「思いやり」⑩「工夫・気遣い」⑪「苦労」⑫「達成感」⑬「今後の願い・目標」⑭「母性」⑮「葛藤」⑯「責任感」⑰「理由付け」⑱「問題解決」⑲「分析・自分の考え」⑳「成長」(21)「特徴表現」の全ての項目で好ましい変化が見られた。このことから、長期的飼育活動が児童に何らかの正の影響を与えていることが分かった。

1 「振り返り」から見られる児童の心境

飼育始めの命あるものとの出会いによる児童の心へインパクトが生じ、その中のマイナス感情が長期飼育活動を行う中で心情の変化から、動物に対してのプラス感情へつながり、気持ちに余裕がうまれたことから、自らの体験の振り返りができるようになったと考えられる。

2 「個体認知」による飼育効果の変化

「感情移入」「思いやり」「工夫・気遣い」「問題解決」「苦労」「葛藤」の項目は、個体認知をした動物に対する思いや行動から出てきていた。そのため、飼育活動を有意義にするためには個体認知が重要な鍵になると考えられた。

3 「観察力」の中の児童の揺らぎ

相手（飼育動物）が命ある生物であり、感

情をもつものと認識したことにより、自分の予想もしない行動や思い通りにいかない相手への関心が観察力を広げていると考えられた。このことから、観察から感じとった感情が大きくうずまいており、自分と違う相手の存在に気づき、その中で「感情移入」「思いやり」「工夫・気遣い」「問題解決」「苦労」「葛藤」が起これ、これらが何度も繰り返されていくのではないかと考えられた。児童により、この6つの働きを感じる順番は異なり、大小異なる働きが繰り返されていた。つまり、観察力は長期的活動の中で身に付き、その中で喜怒哀楽さまざまな感情によって、「感情移入」「思いやり」「工夫・気遣い」「問題解決」「苦労」「葛藤」というものが繰り返して起きている。これが、子どもの心を柔軟なものに変えていく過程に含まれるのではないだろうか。

4 飼育活動での児童の最終変化

長期的飼育活動による、児童の最終変化として、「母性」の芽生え、「達成感」による喜び、「責任感」による意識向上がみられた。この3つは、ここまでの「振り返り」、「固体認知」、「観察力」の先に芽生えてくるものであり、今までの影響力のまとめと考えてよいだろう。長期的な飼育活動には、児童の心的揺さぶりの影響のうえに「母性」「達成感」「責任感」の芽生えがとらえられた。

5. 生命との関わりとしての飼育体験の意義

活動や関わりの中でも飼育活動としての体験は、命との関わりが大きな影響を与えてきた。命あるものとの関わりだからこそ、思い通りにならない葛藤や相手の予想外の行動に戸惑い、相手意識をもって心的に距離を縮めようとする行動が多く見られた。ここに心的成長が大きく見られると考えられる。そして、動物飼育活動を通して生命の誕生と死を体験することにより、命の尊さや重みを実感している。これは飼育活動でしか感じる事の出来ない、飼育活動をする大きな意義だと言えるだろう。

6. 長期的活動の先の成長と実感

長期の飼育活動をしている児童は、何らか

の今後の未来像を一人一点は必ず記載していた。それは、動物への今後の願いや自分についての目標であった。児童は、自己の変化に気づき、自己の学びについて総括して記載している児童が多かった。これらは、今までの活動に誇りが持てるからこそ思い描いた姿だと考える。

こうして、飼育体験から生命認知へと児童の内面が成長していく過程には、児童の体験、感情と観察力の関係が往復しながら深まっていくことが促されていくのだと考えられ、下記の図1にその過程を図式化してまとめた。

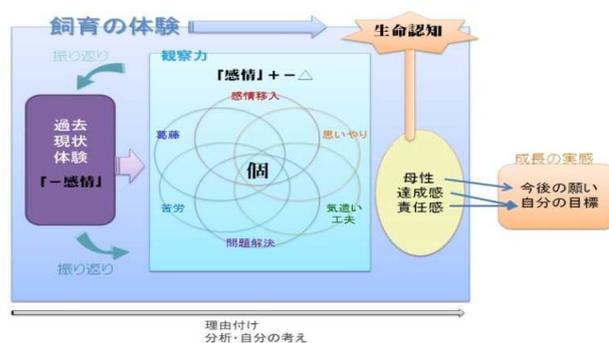


図1 動物飼育による段階的影響力

まとめ

飼育活動の取り入れ方の違う小学校児童を対象に「授業質問分析」による授業での大枠の児童の様子の違いと、「作文分析」による児童の個々の捉え方に迫る分析の結果、飼育活動の意義が感じられた。

分析の結果、飼育活動には、長期的な活動から芽生える学びと、命ある動物との関わりもつことの関連性からの意義が見いだせた。以上の影響を児童に与えられる活動を効果的な飼育活動とし、飼育活動の体験を通して、生命認知をすることが最大の意義であると考えられる。活動だけの体験学習ではなく、命ある動物飼育体験にのみ学ぶことができるものである。

(*大妻女子大学4年(現さいたま市職員),

**大妻女子大学)

